「なぜ高校野球だけ金属バット？」「7回制検討は必要ない」 名将が問題提起、「批判気にせず突き進め」 鍛治舎巧さん ＃7 【ぎふ高校野球・名将流儀】

次代への提言

2025 年 2 月 20 日 16:00

鍛治舎巧監督（73）のインタビューの最終回は、前回に引き続き「次代への提言・下」。名将に日本の高校野球全般、岐阜県高校野球についての熱い思いを聞いた。

野球の質的変化や大会のあり方まで高校野球の今後について、さまざまな提言を語る鍛治舎巧監督＝大阪府枚方市の自宅

鍛治舎巧（かじしゃ・たくみ） 1951年、揖斐郡大野町生まれ。岐阜商高（現県岐阜商）のエースとして69年選抜ベスト8。早大を経て社会人野球の松下電器（現パナソニック）で選手、監督。全日本コーチも務めた。中学硬式野球では、枚方ボーイズ監督として12年間で12度日本一になった。高校野球はNHK解説者を25年務め、同社役員を退任した2014年春、秀岳館高（熊本）監督に就任し、3季連続甲子園ベスト4。母校監督は18年春から24年8月末まで務め、春夏4度の甲子園に導いた。現在、枚方ボーイズ監督に復帰した。

―新基準バットで高校野球がスモールベースボール化する中で、広島商が昨秋の明治神宮大会で準優勝。〝広商野球〟が復活し、幅を利かせていくのでしょうか。

鍛治舎 昨秋の明治神宮野球大会は、全国から注目選手を集めた私学の横浜と、地元密着の公立伝統校の広島商が決勝に勝ち上がり、視点としても実に面白い大会だった。

その広島商が最後に甲子園で優勝したのが50年以上前の1973年。今般の新基準バット導入で、それまでの野球に戻りつつあるが、あくまで過渡的。今は得点能力が落ち、ホームランの確率もはるかに落ちたので、守りの広商野球、つまりバッテリー中心に堅実に守り、1番が出て、2番が送って、クリーンアップでかえすというような打順通りの野球が再び幅を利かせるようになった。

その広島商も明治神宮大会決勝では、終盤2点差、1死二、三塁の場面で同点を狙う2ランスクイズをやるのかなと思ったが、強攻して3―4まで迫った。ひとつの進歩だと思う。伝統の広商野球なら2ランスクイズで同点を狙う場面だった。

荒谷忠勝監督は、私が県岐阜商監督時代に練習見学に訪れ、一日中、ビデオを撮って帰った。私の数的論理に基づく野球を取り入れ、自転車やボートこぎなどを交え、ローテーションする打撃練習もやっていると聞く。多少は参考にしてくれたのかなと思う。

決勝は序盤0―4になって、これは0―10の試合になるのかなと心配したが、左の軟投派投手が出てきて横浜打線の勢いを止め、抑えた。あれは1973年以前の広商野球。それでいて、最終1点差で敗れたが、盛り返して、あわやというところまで追い詰めた。伝統の広島商野球にサムシングニューをプラスアルファすると大舞台でも勝率が上がることを証明。新基準バット導入過渡期での戦い方を範として示したといえる。

―2025年は新基準バット導入2年目。次代でトップになるために各校が傾注した低い打球を打つ昨年の対策にプラスさせるべきことは。

鍛治舎 その前に、そもそもU18（18歳以下の国際大会）も大学野球も木製なのに、高校野球だけが低反発の金属バットを使うのはおかしいと思う。投手陣の安全性確保は理解するが選手は低反発にすぐ慣れるので打球速度は芯でとらえれば従来と大差なくなる。

県岐阜商でも昨夏3年生の加納朋季や垣津吏統は、最終的には低反発バットでも関係なく大きい当たりを飛ばしていた。甲子園もすぐにそうなる。

新基準バット導入元年、外野の頭を越す打球を放った県岐阜商の垣津吏統＝長良川球場

投手の安全性を求めるなら木製バット使用だ。木製は芯を外せば折れやすく反発係数は小さくて、比較的安全だ。どうしても安全性にこだわるなら、バットの変更より、ボールを替えるべきだ。身体に当たるのはバットじゃなくボールだ。ボールの反発係数を抑えれば問題ないはずだ。

木製は金属のように900グラム以上という基準がない。今、これだけ小さな変化球が多い中、金属バットの〝900グラムの壁〟は大きい。木製は、800グラムでも上部をくりぬいたら785グラムになる。それならスイングスピードが上がり、スイートスポットも広い。メーカーに働きかけをしているが、合板でよいから製造コストが1万円を切る額に抑えられれば個人で買う場合でも木製にした方が利点が大きい。

どういうわけか、日本高野連の規定で木製を使う場合だけは、滑り止めスプレーが使用不可となっている。金属を奨励するための措置なのか、理解できないが理不尽だと思う。現場指導者は本音では、みんなそう思っているのではないか。

―バッティングのトレンドは。

鍛治舎　現在、各年齢層ともに投手のレベルが打者のレベルを凌駕（りょうが）している。スピードアップはじめ球質、球種のレベルが格段に上がっているのは、NPB打撃ランキングの数値をみても一目瞭然。3割をマークするのが至難の業となっている。それを踏まえるとバッティングは、基本から応用に移りつつあるといえる。

世界の野球はフライ革命が終わり、レベルスイングに戻った。大谷翔平はパワーがけた違い。150キロのボールを150キロ超のアッパー気味のスイングでジャストミートすれば必然的にホームランになる。大谷レベルのパワーがなければ脇を絞ったレベルスイングが正解だ。ボールに対して正しいスイング軌道を保つことで長いジャストミート領域をつくることができてヒットの確率は高くなる。手首を返さないでボールを捉え、押し返して打球が低いライナーで内外野手の頭上を越えていくイメージを描くと良い。

ボールが低めに集まれば、膝をやや深めに折って重心を低くし地面に対して正しいスイング軌道を保ち、確実にジャストミートするバッティングで低く強い打球が野手の間を抜いていく野球を展開することだ。

逆に膝の固い打者は、ミートの瞬間、前の膝をピンと伸ばし、脇を締めて前膝の延長線上にバットを一気に振り下ろすスイングを心がければ、低く強い打球を打つことができる。一律にアッパースイング、一律にレベルスイングという時代は終わった。状況に応じたバッティング、ピッチングをしたチームがより多く勝つ時代だ。

高校野球は、新基準バット導入と相まって、長打激減の中で、ゴロだけ、バントだけの野球では勝てる訳がない時代に突入。今春にはバットメーカーが、規定ぎりぎりの金属バットを出し打球が飛ぶようになるだろう。そこでまた野球が変わる。付け焼き刃の野球では勝率は低い。

改革の議論が進む高校野球選手権。昨夏、初めて導入された2部制のためナイターで初戦を戦った岐阜代表の岐阜城北＝甲子園

―大会運営や組織づくりも過渡期を迎えている高校野球の今後のあり方については。

鍛治舎　今行われている七回制検討は必要ないと考える。第一、暑さ対策のいらない選抜を七回にするのには無理があり理屈が通らない。

昨夏のインターハイにおいて同じ屋外スポーツのサッカーは神村学園（鹿児島）と昌平（埼玉）が決勝まで進んだ。7月27日～8月3日の8日間で6試合している。試合は1日2試合。午前9時30分からと、12時スタート。日本高野連が甲子園で試行した猛暑を避ける1日二部制とは異なる。ハーフタイムがあるだけで、野球のようにベンチに座らず、野球で設定しているクーリングタイムもなく、選手はグラウンドを走り続ける。その運動量は、野球より、はるかに多い。天候も日程もプレー自体も過酷な条件下での全国大会だ。にもかかわらず、批判的な声は私の耳には聞こえてこない。言い方は乱暴だが、甲子園との注目度の違いだと感じる。

女子野球は、ベンチ入り25人、DH制を先に導入している。日本高野連は選手の将来を見据えた上で、受け身ではなく先進的な改革のメスを入れてほしい。高校野球は孤高の存在であるべき。高体連傘下のスポーツと異なり、地域に支えられ、地域まるごとで戦っていくのが高校野球、批判を気にせずに突き進んでほしい。

岐阜県高野連の皆さんも取り巻く周辺環境が変わっても、現行通り森川賢二会長、鍵谷英一郎専務理事の陣頭指揮よろしく、自主自立路線を貫いていただきたい。同時に、岐阜県すべての階層の野球人を良きパートナーとして、県独自の体制構築を一致協力してつくり上げ、悲願の戦後日本一に向けた確固たる理論と実践を、体系的大局的に、手探り手づくりで確立されんことを強く願う。

新設〝野球王国ぎふ〟を祈念しつつ。＝おわり＝。

（聞き手・森嶋哲也）

新設“野球王国ぎふ”を祈念する鍛治舎巧監督＝長良川球場